

第一〇章 悪い者から救ってください

ナチスの親衛隊員が、キャンプの収容者全員の前で、二人のユダヤ人男性と一人のこどもを絞首刑にした。二人の男はすぐに絶命した。しかしこどもは、断末魔の苦しみに三〇分以上もさらされることになった。「神はどこだ？ 神はどこにおられるのだ？」わたしの背後にいた誰かがつぶやいた。

絞縄を首に巻きつけられて吊り下げられ、長時間の責め苦に苦しんでいるこどもを前に、背後の男は再び、叫んだ。「神は今、どこにおられるのだ」と。

その時、わたしは自分の中で答える声を聞いた。「神がどこにいたのかって？ いるとも。ここにだ。神はここに、この絞首台で吊り下げられている……」

“十字架につけられた神”

「わたしたちを誘惑に遭わせないでください」という嘆願に、心配、不安のひびきが含まれているとするなら、主の祈りのこの最後の願い、「悪い者から救ってください！」を父に向けて叫ぶとき、われわれの切実な願いは頂点に達する。もはや今、願うことは何も残されていない。すべてが語られたのである。悪からまた悪い者から救われるということは、父の王国において神の子としての自由を享受する用意ができたことを意味する。悪が完全に征服される時、神の国が出現する。そして新しい天、新しい地がスタートする。そこでは神の御名があがめられ、神の意志が完全に行なわれる。しかし、そのためには悪がせん滅されていなければならぬであろう。なぜなら悪は執拗に歴史の一部であり続け、「ほえたけるライオンのように、だれかを食い尽くそうと探し回って」(一ペト五八)人間を脅かし続けるからである。

状況としての悪

われわれは悪を見くびってはならず、悪に対する警戒を決してゆるめてはならない。悪は、

ただ空中に静かに漂っているようなものではないし、目的地へ行きつこうとするわれわれの努力を遅らせるもの、といっただけの存在ではない。悪はもっと積極的であり、もっとおそろしい相手である。それは力強く、歴史と共に動き、われわれの生を設計するものである。この意味で悪は、構造的であるに足る特質を備えている。この構造は、変形のシステムを組織していて、このシステムの限界内で維持されている全てのプロセスに、統一や一貫性や全体性や自動調節能力を与えている。⁽¹⁰⁸⁾

そしてこの構造は、罪と邪惡の自己独自の筋書きを作り出す。また、このシナリオは、歴史のある時点を特徴づける背景となっているさまざまな要素をもとに、紡ぎ出される。悪の行為は、あらかじめ決定された構造、用意されたシナリオが実現された結果である。われわれは、この構造、シナリオを自ら取り入れ、それを人生に受け入れ、現実生活の目標とし、その結果、不正で罪深いおこないに赴いてしまう可能性がある。たとえばプエブラ会議は、資本主義システムを罪のシステムであるとして非難した（第九二項）。大方、このシステムで「罪の構造」が生じている。この「罪の構造」が、ラテン・アメリカで形成され、「深刻な構造的対立」を露呈している。ひと握りの人間の富が増大し、大多数の人間が貧窮の度を強めている（第一二〇九項）。

このシステムはさらに、対立や争いの支配する経済的政治的シナリオを生み落としてゆく。

すなわちそこでは政治的抑圧がおこなわれ、労働組合が弾圧され、「国家の安全」が第一義とされ、社会危機が高まり、等々である。日々の新聞紙面をにぎわす政治事件は、こうした背景があつてのことなのである。そこに生きる人びとは彼らの社会生活をこのシステムに一体化させる。しかしこのシステムは、本質的に排他的、独占的なシステムであり、ごく一部の者に富と特権を蓄積させるが、この富と権力を一手に握る者は、ほとんど社会的責任を果たすことなく、このシステムを維持する代理人、不正義に参加する手先となるのである。⁽¹⁰⁹⁾かくして悪の全サイクルが完成される。

悪は歴史の中にある。なぜならそこには誘惑があるからである。そして人は、誘惑に陥る。彼らは罪をおかし、良心の教えるところを裏切り、神の声に背を向ける。神の声は通常、その「時のしるし」⁽¹¹⁰⁾によって明確に示されるものである。この罪は独自の歴史、独自の生産機能を作り出す。そしてこの罪は、関連しつつ自律性を發揮する。すなわち、それはわれわれが奴隷状態にあると感じるところまで、われわれひとりひとりに力をふるう。「わたしは、罪に売り渡されています。……わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。……わたしの五体にはもう一つの法則があつて心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります」(ロマ七14、19、23)。

われわれは聖ヨハネが世の罪(ヨハ一29)と呼んでいる「罪の状況」の中に生きている。し

かし、「世の罪」は、世界そのものが罪であるという意味でないことは、はっきりさせておかねばならない。この世界は、第一義的には、神によって作られた良き被造物なのである。

そのために御父は最愛の御子をここにつかわされたのである（ヨハ一9、10、三16、二コリ五19、一テモ一15）。しかし被造物はことごとく、人間の歴史的悪業によって汚されてしまった。「罪が世に入った」のであり（ロマ五12）、この世は完全に墮落しているのではないが、払拭しがたい傷、しるしが残った（ヤコ一27）。かくしてわれわれが現在体験しているこの世は、「神の敵」（ヤコ四4）であり、不幸の源であり（二コリ七10）、イエス・キリストを認めなかった世界である（ヨハ一10）。かくして「この世界」は、形而上学的な意味においてではなく、歴史的な意味において理解されねばならない。つまりこの世は、「不義によって真理の働きを妨げる」人間（ロマ一18）、「天地創造の時から預言者の血を流した」人間（ルカ一一50）、そしてあらゆる類の偽善、罪に支援を与えた人間（マタ二三29〜36）、こうした人間たちによって象徴されるものである。

この罪の深刻さは、これが現在、状況となり、構造となっているという事実にあるのである。あらゆる状況は大なり小なり、独立性を保ち、客観性をそなえている。罪は個人の問題というだけでなく、重要な社会的、歴史的側面を持っている。この「状況」ということばの定義をおこなうなら、「われわれがある時点において己れを見出す周囲の条件の総体」「われわれを

完全に包み込み、われわれに影響を与え、われわれを、周囲の世界の一部となすもの」ということになる。⁽¹¹⁾この状況は原初から、人間が甘受すべき運命として存在したものではなかった。後にこのようなものになったのである。この運命は、歴史全体にわたる人間の罪によって生み出されたのである。

こうした罪は、それをおかした人間の死とともに死ぬことはなく、むしろ、その罪の犯人である制度や偏見や道徳的法的基準や社会の慣習の形の中に生きのびている行為の数々によって不朽のものとなっている。その大部分は各種の悪徳、あるいは民族的、道徳的偏見、不正義が特定の間人や特定の社会階層の集団に対して、性懲りもなく加えられ続けている。ある人びとは皮膚の色が黒いというだけで、あるいは貧しいというだけで、社会的な恥辱を受けるのである。歴史的に作り出されたこの状況が、そこに生を受けた人々の運命の内容となっている。彼らは、その伝統的な基準がそれによって社会化され内化される過程において犠牲となる。それらの基準というのは、ほとんどが悪行や罪になうものである。状況の中で人間はすでに分類されていて、彼自身彼女自身の意志また決定は、関与する余地がない。

このように人間は、「世の罪」ゆえに、このプロセスに組み込まれ、参画してゆく。彼らがこの状況を妥当であると思ひ、これを受容するにつれて、世界の罪は成長してゆく。彼ら自身の罪がそれに貢献するからである。かくして彼らは、すでにその状況の中にあるがゆえに「世

の罪」の犠牲者である一方、もう一方では彼ら自身の罪をおしてこの状況の維持、蘇生に手を貸すことによって世の罪を再生産する代理人となっている。

悪には歴史を通じて人類を苦しめるある種の邪悪な結束がある（ロマ五12～14、16）。しかし、われわれはここで、われわれの観点を見失ってはならない。古いアダムとの間にかなりの一致があるというのであれば、新しいアダムとの間にはもっと深く、大きな一致が存在するのである。なぜなら「罪が増したところには、恵みがなおいっそう満ちあふれる」（前掲五20）からであり、「死が支配するようになったとすれば、なおさら、神の恵みと義の賜物とを豊かに受ける」ようになる（前掲五17）からである。しかし、ここで悪の力を強調する必要はない。われわれはその力が非常に強いことを知っている。その力は人間の歴史の中に人間の姿をとって降臨された神の御子を廃することが出来たほどのものだったのである（ヨハ一11）。そして今日この時においても、他の神の子らを葬り続けている。⁽¹¹²⁾

悪の具体的表現

この悪の背後にいるのは何者なのであろうか？ 誰のさしがねによって、悪業が現実のもの

になるのだろうか？ このことについて聖書は明確に記している。その霊的な存在は、「誘

惑する者」(マタ四3)、「敵」(前掲一三39、ルカ一〇19)、「巨大な竜」(黙一二9、二〇2)、「蛇」(二コリ一13)、また「人殺しであつて……真理をよりどころとしていない(者)」(ヨ

ハ八44、一ヨハ三8)、「悪魔」(マタ一三39、ルカ八12、使一〇38)、「サタン」(マコ三23、26、

四15、ルカ一316)、「ベルゼブル」(マタ一二24、27、マコ三22、ルカ一15、18、19)、そし

て「この世の支配者」(ヨハ一二31、二コリ四4、エフエ二2)、などと言い表わされている。

簡単に言えば、彼は悪い者であり、虚偽や憎しみ、病いや死の創造者である(マコ三23-30、

ルカ一316、使一〇38、ヘブ二14)。正しいおこないをしない者、兄弟、姉妹を愛さない人間

は(一ヨハ三10)、カインのように、(同三12) またイスカリオテのユダのように(ヨハ六70、

一三2、27)、悪魔の子と見なされる。イエスのたとえ話の「毒麦」は、悪い者の子らであり、

彼らは神の国の子ら(マタ二三38)、そして神の国に反対し、これを妨害しようとする。

この悪意ある存在を、われわれはどう理解すべきであろうか？ 最初は神によって善き者と

して創造されたにもかかわらず、試練の期間を経るとともに神にそむき、反抗する存在とな

り、ついに「悪い者」と称されるようになってしまったのであろうか？ それとも、これは言

葉だけの存在であり、人間自体の背信、変節によって歴史的に生成され、広くはびこることに

なった悪に捕らえられ、とりことなっているわれわれの体験をあらわしている陰鬱的な人格化

なのであろうか？ 主の祈りの最後の一節、最後の嘆願を理解する上において、これはきわめて重要な問題である。この「悪」は、「悪い者」として理解されるべきであらうか、それとも抽象的な「悪」としてとらえるのが正しいのであろうか？ われわれは、悪（罪、絶望、病氣、死）から救出されるのであろうか、あるいは悪い者（悪魔、サタン）から救い出されるのであろうか？

この部分の解釈について、現在もなお聖書学者の意見は分かれたままである。というのも言語学的分析においては、この問題を解決するための納得のいく方法がないからである。⁽¹¹³⁾しかし大多数の学者は“evil”を「悪い者」（すなわち「サタン」「悪魔」と理解している。この最後の嘆願は、その直前の嘆願を強め、きわだたせる役割を果している。「わたしたちを誘惑に遭わせないで下さい」——そして特に、（最悪の事例を示し）——「悪い者から救ってください」と。

主の祈りの文脈は、すでにこれまで何度も述べた通り、黙示的であり、終末論的である。歴史の終りには、キリストと反キリスト陣営の間には、そして神の国の子らと悪い者の子らとの間には、大きな衝突、争いが起きる（マタ一三37〜40）。キリストも反キリスト側も、それぞれの勢力を展開するであらう。歴史的に弱く罪ある存在である人間は、最大の危機に直面することとなろう。われわれは信仰を捨てる恐れがあり、悪魔の畏にはまる可能性があるのである。

る。こうした流れにおいて、神を信ずる者は自らの全存在を賭け、不安におののきながら、「父よ、悪い者が現われました時は、どうかその者から私を救ってください―」と祈るのである。パウロは述べている。神なる父は「わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました」（コロー13）。

聖書解釈で“evil”を「悪い者」と解釈する方を選んだとしても、それでこの問題、つまり「悪い者」（サタン、悪魔）の存在に関わる問題が神学的に解決されたということにはならない。「悪い者」が聖書の中で明白に言及されていると立証するだけでは十分とは言えないのである。「悪い者」という表現が持つ神学的内容について問われなければならない。霊的存在に関わるべきであろうか、それとも広くはびこる悪の文学上の体現と関係すべきであろうか？ この設問に答えるには、まじめな聖書解釈学以上のものが求められる。すなわち認識論的、神学的レベルでの考察が必要とされるのである。

悪魔の問題というのは、神学者たちが白熱した論議をおこなってきた主題であることをわれわれはよく知っている。⁽¹⁴⁾そして少なからぬ神学者が、悪魔とはシンボリックな存在にすぎないとみなす傾向にある。カトリックの高名な聖書釈義学者ルドルフ・シュナッケンブルグの言葉を検討してみるのが良いであろう。

サタンを理解するにあたって、彼についての神話的概念と「人間化された」概念を取り除いたとしても、この悪が歴史に存在し、人間の行為を通して歴史を支配するがために、これを個人に關与する靈的力と理解するか、あるいは単に惡の具體的顯在化と理解する必要があるかという問題が、新たに關連する問題として、浮上してくる。今日のわれわれは、過去の人びとと同じ確信をもって、前者を擁護しようとはしない。非神話化の議論は、この問題について警戒を呼びかける。すでに保持されない世界觀と深く結びついた、新約聖書の中の數の斷言を、われわれの現在の知識の中でどこまで解釈し得るのか、あるいはどこまで解釈すべきなのかという問題は非常に困難であり、たった一人の解釋學者が答えられるような問題ではない。そしてこの問題はまた、最近あらためて論議の火が付けられた天使と惡魔に關する問題とも關係を持っている。サタンとかデーモンとか「諸力」について、われわれに思ひ浮かぶことの様々な言い方、以前から形づくられている文体上の言い回し、様々な出所のすべてが一樣に示していることは、これらすべてにおいて、われわれは、あたかもそれらが「現実に実在する実體を表わしているのではないから、文字通りにとる必要はない」という仕方(115)で處理できるような表現形式を扱っているのではないということである。

この指摘はわれわれに、聖書解釋學による調査を踏まえた上での知的誠實さを証明すると同

時に、聖書解釈学だけに頼つてはこの問題はなかなか解決されないことに気付かせてくれる。われわれはここでこの問題に決着をつけたいとは思わ⁽¹¹⁶⁾ない。ただ、次のような事実⁽¹¹⁷⁾に注意を喚起しておきたいと思う。それは、悪というものを抽象的な原理の中に見出そうとせず、善かれ悪しかれ、客観的な形而上学的リアリティーを帯びる生きた力の中に求めるとい⁽¹¹⁸⁾うのが、世界じゅうの宗教的思考の特徴であるということである。悪は決してあいまいな、抽象的な形で体験されてはこ⁽¹¹⁹⁾なかつた。もちろん、恵みや善としても体験されはしなかつた。われわれは、好むと好まざるとにかかわらず、つねに具体的な状況を扱うのであり、人間の関係、つまり人間同志の思いやりあふれた関係に関わる建設的な、あるいは破壊的な歴史の力、権力や支配に関する観念、あるいは協力や参画に関する観念のもとに現実の社会生活の中でそれを具現する人間あるいは集団という、具体的な荷ない手について論じ分析するのである。悪は、仮面や何か偽りの装いの背後に隠れるかもしれないが、明らかに特定の顔を持っているのである。

旧約聖書の中では、それはたとえば、神に刃向かい、神の聖なる民を窮地に落とし入れる政治の力として登場する。すなわち、ゴグとマゴグ（エゼ三八）がそれであり、ダニエル書（七7、8）に述べられている「小さな角」を持つ第四の獣が、それである。この獣はどうやら、アンティオカス・エピファネス（紀元前一七五〜一六四年）治世下のシリア帝国を意味しているらしく、イスラエルの民はこの帝国のもとで、辛酸をなめたのであつた（ダニ七25）。黙示

的な環境はわれわれに、神の最後のしたたかな敵手として、「最後の時の圧制者の神学体系」を与えている。新約聖書は、キリストに敵対する者の姿を描く（二テサ二1～12、黙一三1～11、ヨハ二18、19、四3、二ヨハ七）。彼はキリストの再臨に類似するものを体験し、悪をなす者たちの集団にとり囲まれている（二テサ二9～11、黙一三8）。キリストは信心の神秘を体現している（一テモ三16）のに対し、反キリストは不法の秘密の力を体現する（二テサ二7）のである。⁽¹¹⁸⁾

宗教形而上学は、具体化しようとする傾向を持って超自然の枠組の中にこれらの実在を實體視しようとする。これが、宗教形而上学を成り立たせ、そこに表現力をもたせる言語であり、文法なのである。それゆえに宗教形而上学にとっての神学的理解とは、写实的描写を越えて、それらにその現実性と理念をできるかぎり付与しようとすることなのである。この作業、努力においては彼らを非神聖化するかに見えるけれども、この試みは彼らが歴史内部の現実的存在であり、人間の悪の表われであると理解しようとしているのである。人間の悪は単なる個人が、それに対抗して自分を守ることの難しい、集団的な暴力として体現されている。そこで、悪い者とは簡単にいえば、不正義の組織体であるか人間にとって本質的な呼びかけから背反、脱線する者ということである。その背反、脱線は歴史的に層をなして正義であり善である神の霊——神の国の実在——に永遠に敵対している。

心理的、社会的發展は、眞実や調和、コミュニティの中で、すべての人がその生の全てにおいて参加するという成長を必然づけるのではなく、むしろ諸矛盾から悪化の方向に向かうと仮定できる。この形の表出では、世界の終わりとは、壮大なカタルシス、すなわち浄化のための危機のプロセスを意味するものであり、このプロセスの終着点において神は勝利し、歴史を超越した段階に歴史を導くのである。そしてその時すべては過ぎ去るであらう。すなわち終末が到来し、それと同時に新しい始まりが来るのである。この弁証法的歴史にピリオドが打たれ、歴史の新しい相が、人間が長らく待ちわびた神へ向かう動きが、スタートする。キリスト信仰はこの眞理を、象徴的な言葉で次のように表現している。「その時が来ると、不法の者が現われますが、主イエスは彼をご自分の口から吐く息で殺し、来られる時の御姿の輝かしい光で滅ぼしてしまわれます」(二テサ二八)。

イエスそして悪への勝利

新約聖書の中にわれわれは、一つの深い、また確固とした信念を読み取ることができる。それは、偉大な力を持つイエスがわれわれをサタンのくびきから救い出してくださるという揺る

ぎのない思いである。⁽¹¹⁹⁾ 当時の神話的解釈によれば、あらゆる病気、疾患とも、サタンの力の発露であり、顕現であった。彼は人間を自分の虜囚としている。それゆえ人間にはあらゆる種類の艱難辛苦がふりかかってくるのである。しかし、この「強い人」(マコ三27)を征服するために、いま、さらに強い人が立ち上がられた。

イエスは当時の宗教的形而上学を受け入れている。彼はサタンを、歴史における力(ルカ一〇19の *dynamis*)として、すなわち軍隊のような組織(マコ五9、マター一〇25)として、理解し、そのサタンの力の終焉も間近いことを承知している。「わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ」(ルカ一一20)。

神の国は、この世の国の対極に築かれつつある。そしてこの王国は、悪い者に手ひどい損害を与えるのである(マコ一23、25、39、四39、ルカ一三16⁽¹²⁰⁾)。悪魔が追い出される度に、彼に対する更に新しい勝利が成就され、彼の最終的敗北が、一層鮮明となる。そしてこの勝利の力が、イエスの弟子たちに授けられた(マコ六7、マター一〇8、ルカ一〇19)。七十二名の弟子が遣わされたところから喜んで帰って来て、「主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します」と報告した。イエスもそれを喜び、「わたしは、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見ていた」と言われた(ルカ一〇17、18)。イエスは幻をいだいていた。つまり、サタンの力が絶滅すると、天の国が現われ、そこで人間は自然と和解する。なぜなら「あなたが

たに害を加えるものは何一つない」(前掲一〇19)からであると。

福音書に記されたこの見通し、展望はきわめて重要であり、われわれはこの焦点から決して目を離すべきではない。というのはイエスにとってこの関心事は、悪い者に対する勝利というよりむしろ、神による救済、特に弱い者、貧しい者、社会の底辺に追いやられた人びとに対する救いの計画という福音の宣言なのである。神が望まれる新しい秩序を実現し、新しい時代の出発を告げ、神の国の存在を明らかにするのは人生の悪魔的次元に対する勝利である以上に、癒しなのである。それゆえに弟子たちは、多くの預言者や王たちが見たくとも見ることできなかつたものを見た点で幸いなのである(ルカ一〇23-24、マタ一三16-17)。

結局、イエスに従う者たちは、クムランのエッセネ派のように、悪魔の否認を第一義とする道を歩んだのではない。イエスが弟子たちに求めたのは、まず神の国を求めることであつた。イエスが熱心に勧めたのは、制御不能の、また恐ろしい力を持つ存在への警戒や用心ではなく、弟子自身の心のあこがれや切なる思いに対する警戒であつた。なぜならこれが人の生を墮落させるものだからである(マコ七15)。人が神の国に入るのを妨害し、生の超越的な意味を体験しようとするのを阻むのは、悪魔というよりむしろ、富であり(ルカ六24-25、一二13、21、一六13)、過度の思い悩みであり(マタ六19-34)、自己中心的な態度であり(マコ九43-48)、人を裁くことであり(マタ七1-5)、権力、名誉、栄光を熱望すること(マコ一〇35

く45)、仰々しいばかりで全く実のない信心(前掲二一15く19)、惑い(前掲二三5く7)、他人の良き信仰をつまづかせる誘惑などである(前掲九42、マタ一八6、ルカ一七1く3)。⁽¹²⁾

世界の害悪、災難の主たる原因は、われわれの冷淡な心、連帯の欠如、愛の不毛に見出されるのである。イエスがフアリサイ派の人びとに批判するものも、これである(マタ二三23)。こうした事柄こそ、われわれの生から放逐しなければならぬ本当のデモン(悪霊)である。それが完成された時、神の恵みがこの世において勝利しているのが見られる。イエスに従うことが福音書に述べられた中心テーマであるが、そこで求められているのは、今述べた新しい心の状態、真に自由にされた態度を創り出すことである。「もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか」(ロマ八31)。

人間の心の決定的な叫び——父よ、わたしたちを救ってください！

主の祈りの「救う」には、ギリシヤ語の *rysaí* が用いられている。この元の意味は、ラテン語の *liberare* あるいは英語の *liberate* (解放する・救う) のもつ意味とは異なる。 *liberation* (解放・救い) という言葉が使われる場合は、普通、「虜囚の体験」「鎖につながれ、抑圧され

た状態」が前提として置かれている。このことは、罪や悪が人間の生を奴隷状態に押し込めている状態があるので、ここで証明が可能である。こうした状態の中で、神が「解放者」として姿を現されたわけである（詩一八2、四〇17、七〇5、一四四2、ダニ六27）。神の解放の行いは、聖ヒエロニムスによるウルガタ聖書の中に「liberate」という表現で、約二〇〇回も示されている。⁽¹²⁾たとえば「真実の証人は魂を救い」（箴一四25）、イスラエルの民はエジプト人の手から解放された（出三8、一四30、一八10）。

しかしギリシャ語 *ruesthai* の本来の意味は、奈落の縁から人をすばやく引き戻すことであり、旅における事故、変化から人を守ることであり、道に待ち構えるワナから守ることである。その事例をわれわれは詩編に見ることができる。「どうか、わたしをお守りください。わたしに対して仕掛けられた罠に……陥りませんように。主に逆らう者が皆、主の網にかかり、わたしは免れることができますように」（詩一四一9〜10）。「泥沼にはまり込んだままにならないように、……大水の深い底から助け出してください」（前掲六九15）。「神はあなたを救い出してください。仕掛けられた罠から、陥れる言葉から」（前掲九一3）。

ここで強調されているのは、巡礼者の生の体験、神の道を神と共に歩むという契約である。この道程においてわれわれは、多種多様な危険を体験する。底なしの淵が口を開けて待っているし、敵による罠にも遭遇する。そして思わぬ攻撃を受けることもある。こうした比喩的な

ことば、表現の枠内において、悪い者とは何をするのであろうか？ 彼の仕事は、われわれを誘惑することであり、良き道から逸脱させることであり、われわれに誤った方向を与えることである。これに対して神は何をなさるのであろうか？ 神はわれわれを危険から守り、待ち伏せから逃れさせ、われわれに旅の正しい方向を指し示してくださる。神はヤコブに言われた「わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで、決して見捨てない」(創二八15)。イザヤ書では次のように述べておられる。「あなたを贖う主はこう言われる。……わたしはあなたを教えて力を持たせ、あなたを導いて道を行かせる」(イザ四八17)。またイザヤは神に、やや不満そうに問いかける。「あなたはわたしたちの父です。……『わたしたちの贖い主』これは永遠の昔からあなたの御名です。……なにゆえ主よ、あなたはわたしたちを、あなたの道から迷い出させ」るのですか、と(前掲六三16-17)。

この神の道とは何であろうか。それはわれわれを正義や真理や友愛へと導き、自己中心の力と抑圧する力を打ち砕く方向へといざなう歩みの道である。すでにこれまでの聖書の言葉から明らかな通り、「救い」「解放」「救済」というものは「巡礼」「旅」そしてそれに伴う危険という文脈にそって理解されるのである。そしてその旅は人間の願いの実現に導くかもしれないし挫折に導くかもしれないのである。

世代ごとに、またそれぞれ「悪い者」が活動する。それゆえに各世代の人びとは、この「悪い者」に対して特別に自分自身を守らなければならない。そしてそのために神の守りを懇願しなければならない。この悪の存在は、人間の間に広く蔓延する邪悪の体現化されたもの、形象化されたものである。われわれの世代における「悪い者」、すなわち現代において神に反逆し、人間を墮落させる「悪」は、エリートに現われている集団的利己主義、つまり膨大な数の貧しい人びととの連帯に背を向けている排他的な社会システムという形で現われている。この「悪」には名前がある。それは、私有財産の資本主義であり、国家の資本主義である。これが、金や特権、政治機構の強化という名のもとに、男や女を恐怖に陥れている。おびただしい数の人間が獄につながれ、拷問を受け、殺されている。全世界の人口の三分の二が、悪魔の軍団のくびきにつながれ、とらわれ人の状態に置かれている。すなわち彼らは、飢えや病氣、家族の崩壊、住む家や学校、病院の不足に悩み、苦しんでいるのである。そして、この悪は人を誘惑する術に長けている。彼はいつのまにか人の心の中に忍び込み、自分が作った構造的な不正に無感覚な心を作るのである。

黙示的、終末論的文脈から見ると、主の祈りの中のこの嘆願で直接に名ざされた「悪い者」は、人間が最後の目的地に向かって接近しつつある、と思っている。人間のこの旅の最終コーナーにおいて、数々の障害が出現している。多くの落とし穴が口を開き、目的地に到達す

るばかりになっているこの企てから人間を逸脱させようと、危険や罠が待ち構えている。この苦しみに満ちた、悲惨な状況のさなかに投げ出された信仰者、および信仰の共同体は大声で叫ぶのである。「父よ、どうかわたしたちを、悪い者から、そしてすべての悪から、救ってください！ わたしたちが誘惑に陥るのを押しとどめてくださったように、どうか、悪い者の策略からわたしたちを救い出してください！」と。しかし危険は、歴史の終りにおいてのみ、われわれをさし招くわけではない。この危険は、現在も仕組まれており、あらゆる場所に身をひそめ、われわれを滅ぼそうと狙っている。それゆえにわれわれは父に訴える。「わたしたちを悪から救ってください！ わたしたちが善の道からはずれないように守ってください。わたしたちにあなたを見捨てさせないように、導いてください！」と。

われわれが心の奥底から祈り、願えば、われわれには再び自信が甦ってくる。なぜならイエスがその保証を与えてくださっているからである。「わたしの名によって何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう」(ヨハ一四14)、「勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」(前掲一六33)。「身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからだ」(ルカ二二28)。